

聖書：コリント人への手紙第二 9：1～8

説教題：すべての良いわざにあふれる

日時：2025年2月2日（朝拝）

パウロはこの手紙の 8～9 章で、エルサレムの貧しい聖徒たちを支えるための援助献金について語っています。前回までに見たことですが、コリント教会はすでにこのプロジェクトに参加する意思を示し、また実行し始めていました。しかしパウロとの関係が悪化したためか、あるいは他の事情もあったのか、その活動はストップしていました。しかし今や良好な関係に戻ったと確信するパウロはもう一度、その活動を再開するようにとコリント教会にアピールしています。あなたがたが志し、やり始めたことを完成させよ！と。そして先に遣わす 3 人の使者に関する推薦の言葉を前回の箇所で記しました。

今日の 9 章 1 節でパウロは「聖徒たちのためのこの奉仕については、これ以上書く必要はありません」と言います。この献金については十分なことを以前に語りましたし、それに応じて活動を始めていたコリント人たちだからです。2 節を見ると、前の 8 章ではマケドニアの諸教会が模範として示されていましたが、実はそのマケドニアの諸教会を奮い立たせたのはコリント教会だったことが分かります。パウロはコリント人たちの熱意を知り、彼らのことをマケドニア人たちに誇り、証ししました。アカイアとはコリントを中心とする地方の名です。そのアカイアでは、つまりコリント教会では昨年からの献金の準備をしているとパウロは伝えました。これに励まされてマケドニアの諸教会は、極度の貧しさの中にあってもかかわらず、自ら懇願して、彼らの力以上に献げて、この援助献金プロジェクトに加わりました。パウロは今回先に 3 人を遣わすのは、あなたがたの方でも良く準備してもらうためだと言います。後でパウロがマケドニアの人々と一緒にコリントに赴いた際、もし何の準備もなされていなかったらどういうことになるでしょう。あれだけパウロはコリント教会のことを誇ったのに、これは一体何か？パウロの言ったことはウソだったのか。こうしてコリント教会もパウロも大いに面目を失い、恥をかく結果となります。ですからそうならないように、あなたがた以前に約束していた祝福の贈り物、援助献金をあらかじめ用意しておいてほしいと言うのです。私たちが行った時に突然慌てて対応することにならないようにと。

そしてこの5節に大事なポイントが出て来ます。それは「惜しみながらするのではなく」ということです。もしパウロたちが到着して突然献金を集めることになったらどうということになるでしょう。ある人々は戸惑いながら献金するかもしれません。突然の出費のため、惜しむ心でするかもしれません。みんなもするし、パウロも来たから、しないわけには行かないと。半ば強制的なものになりかねません。そして財布の中にあるものを急いでかき集め、渋々悲しい気持ちでそれをするようになるかもしれません。そうならないように準備をして！と言うのです。そしてこれを「祝福の贈り物として用意して」欲しいと言います。コリント人たちは先にこの献金プロジェクトに参加することを約束していました。そのための熱意を持っていました。エルサレムの貧しい聖徒たちを助け、祝福したいと思いました。その気持ちの通り、彼らを祝福しようとする積極的な、自発的な心の思いの現れとして、この献金を用意してほしいと言います。

ここから献金のアピールは突然行うべきではないということが言えるかもしれません。突然行くと、アピールされる側は考える間もなく、強制された形となります。心が追いつかない状況で、渋々惜しみながらすることになるかもしれません。そうならないように前もってアナウンスし、各自が良く考え、喜びをもってそれをするようにすることが大事であると思わされます。

また私たちの側でもあわれみの働きのために、いつでも対応できるように、あらかじめ取り分けておくことも良い方法かもしれません。必要に応じていつでも献げられるように、ふさわしい機会が来たら緊急のアピールが来ても進んで対応できるように、収入の中からあらかじめ一定額を取り分けておくこと、そのように準備しておくことも良い方法かもしれません。いずれにしろ祝福の贈り物として献げるようにすることが大事なことです。

さてこの献金のための励ましとなる真理が6節以降に3つ記されています。まず一つ目は6節です。パウロは言います。「私が伝えたいことは、こうです。わずかだけ蒔く者はわずかだけ刈り入れ、豊かに蒔く者は豊かに刈り入れます。」ここで献金が種を蒔くこととの類比で語られています。種を蒔くと手元にあった種は自分の手を離れ、一見失われたような状態になります。しかしそのように蒔いてこそ収穫が期待できます。そのように私たちも蒔かなければ刈り入れはありません。またわずかしか蒔かな

い人はわずかしか収穫できませんが、豊かに蒔く人は豊かに刈り取る結果となります。分かりやすい例えであるように思います。

しかしここは誤解されやすい箇所でもあると思います。ここを読んで私たちはどんなメッセージを受け取るでしょう。結局のところ、沢山献金する人が沢山祝福を受け、逆に少ししか献金しない人は少ししか刈り取りがない。そのように読む人が多いのではないのでしょうか。しかし 8 章では献げる額の大小は問題ではないと言われました。8 章 12 節で「持っているものに依じて」と言われました。その人その人の与えられている状態に依じて実行すれば良いのです。少ししか持っていない人が沢山ささげることはできません。その人が持っているものとの比率で考えれば良いのです。しかしこの 9 章 6 節を見ると、結局大事なのはたくさん蒔くのか、蒔かないのか、その量に祝福がかかっているかのように読めます。しかし結論から言うと、実はこの箇所はそういうことは言っていないのです。6 節の「豊かに」という部分には印がついていて、欄外に直訳は「祝福をもって」であると記されています。そしてこれと同じ言葉は前の 5 節に 2 回出て来ました。「祝福の贈り物として」という部分です。先に見たように、5 節では惜しみながらするのか、それとも祝福しようという思いからするのか、が問われていました。それと同じことをこの 6 節も言っているのです。「わずかだけ蒔く者は」の「わずか」とは「惜しむ」という意味の言葉です。あるいは「控える」という意味の言葉です。他の日本語訳の聖書はここを「惜しんでわずかに蒔く者は」と訳しています。つまりケチケチした心で献げること、もったいない、残念だ、という思いです。その結果、少額になるということは起こるでしょう。けれどもこれは 5 節の「惜しみながらする」という言葉に対応しており、そこに強調点があります。そういうしみったれた心で献金する人はしみったれた報いしか受けません。一方、祝福をもって、すなわち相手の祝福のために心から進んで蒔く人は、それに対応して神から惜しみない豊かな報いを受けることになるのです。ですから問題とされているのは金額の大小ではありません。それをささげる私たちの心のあり方や態度が扱われているのです。先の 8 章で言われた通り、私たちは自分の持っているものに依じてこれをします。人によってその額は色々でしょうけれども、それを惜しむ心でささげるなら、その見返りは少ないのです。ケチケチした心でささげたのですから、受け取るものもケチケチしたレベルのものになります。しかし与えられている状況の中で祝福しようとの思いに導かれて喜びをもってするなら、神がそれに応えて豊かに刈り入れるようにしてくださるのです。祝福する人を神が祝福し、気前良く、たっぷ

り返してくださると言われているのです。

ですから2つ目に見る7節で「一人ひとり」と言われています。6節は金持ちだけに当てはまる話ではないのです。どんな人も6節の課題に取り組むことができます。勧められていることは「いやいやながらでなく、強いられてでもなく」ということです。本当はしたくないけれどしないわけには行かないからとか、皆の手前やむを得ずとか、心の中で残念な気持ちになりながら、あるいは恨みながら献金してはならない。パウロはそういうことを全く望んでいません。それでは先に見たようにケチケチした見返りしかありません。たとえ多額の献金をしてでもです。ある人はある状況で非常に大きな額の献金をするかもしれません。しかしブツブツ文句を言いながら、残念な思いを持ちながらそれをするのでは、その価値を壊してしまのです。そうではなく、「心で決めたとおりにしなさい」とパウロは言います。つまり自分で決めるのです。どれくらい献金するか、その額をどうするか、神の前で、自分の信仰の表現として決め、それを喜ぶことが大切です。そうする人を神は愛してくださるとあります。それは神ご自身がまさにそういうお方だからです。神は私たちに何かを与える時、いやいやながら、強いられてではなく、喜んでくださっています。私たちは神のかたちに造られた者として、その聖化の目標は神に似る者となることですが、神は私たちが喜んで時、その姿にご自分の性質が映し出されているのを見てこの上なく喜び、その者を愛してくださるのです。

そして三つ目となる8節で、神はそのようにささげる人をそのままにはしないということが述べられています。ある人は惜しまずに寛大にささげたら自分の生活はどうなるのか、貧しくなるだけではないのかと恐れるかもしれません。しかしここに「神はあなたがたに、あらゆる恵みをあふれるばかりに与えることがおできになります」とあります。「おできになります」とあるのは、ある条件を満たした時にこれが現実化するということを暗示します。それは私たちが祝福の思いで進んでささげる時です。神はご自身にとって最も大切な一人子の御子さえも惜しまずに私たちに与えてくださったお方であり、その方は御子と一緒にすべてのものも与えてくださる方です。その方がどうして、御心に従って歩む者たちに良くしてくださらないことがあるのでしょうか。神はその者にあらゆる恵みをあふれるばかりに与えてくださるのです。

このことを考えれば私たちにとって寛大になれない時はないということになりま

す。私たちはともすると、今は自分の生活に余裕がないから、もう少し余裕ができたら献金したいと思うかもしれません。つまりお金が余ったらもっと献金しようとする。しかしここにある考えは違います。今ある状況において、私たちが祝福の心で蒔くなら、神は恵みの倉を開けてあらゆる恵みをあふれるばかりに与えてくださるので。その結果、8節の真ん中にある通り、「いつもすべてのことに満ち足りる」ということが私たちに起こります。神がそのように守り、補い、満ちあふれる者としてくださるのです。そしてそれは「すべての良いわざにあふれるようになるため」と続きます。私たちが献げる時、神はあふれるばかりの恵みを私たちに与え、満ち足らせてくださいますが、それは単に自分が豊かな生活を送るためではなく、さらに私たちが良いわざに励む者となるためだとあります。この「良いわざ」を広い意味に取ることも可能かと思えます。神の祝福を受けて私たちが益々すべての良いわざ、すなわち神の御心にかなう色々な良い働きに邁進する者となるという意味です。しかしこの話の中心にあるのは、さらにささげる働きのことであると思われま。まとめればこうなります。ささげる人を神は豊かに祝福して下さいます。それは私たちがその祝福を受けてさらに他の人々の祝福のためにとそれを用いるためです。そんなことをしたらまた私の持てるものが少なくなってしまうのでしょうか。しかし神はその人にさらにあらゆる恵みをあふれるばかりに与えて下さいます。それをもって、その人は益々同じ良いわざに励むのです。こうして益々神に仕え、神の御心にかなう働きのために用いられる者となることこそ、私たちにとって真に幸いなことでしょう。この神の祝福の中を歩むようにと私たちは招かれています。

今日の御言葉に私たちはどう応答すべきでしょうか。パウロは7節で「一人ひとり」と言いました。すべての人が今日の御言葉に応答して歩むことができます。私たちは自分に与えられているものの中から神への感謝と信頼の現れとして、喜びをもって、必要を覚えている人々や働きのために、祝福する思いで献げるわざにあずかりたいと思えます。神は喜んで与える人を愛して下さり、あらゆる恵みをあふれるばかりに与え、豊かに刈り入れる者として下さいます。そして今日は教会設立 66 周年の恵みを覚える礼拝の日です。神は杉並教会の 66 年の歩みをここまで守り、導き、祝福して下さいました。この恵みを心に留めて益々今日の御言葉に示されている神のみこころに添って生きることへと励まされたいと思えます。これまでのこの教会における歩みを通して神の恵みは十分であること、神はご自身の御子を惜しまずに与えて下さり、その御子にあってあらゆる恵みをあふれるばかりに与えて導いてくださる方

であることを私たちは経験させられて来ました。その神をこの日、もう一度感謝をもって見上げ、またその神に信頼して、私たちに与えられているものを祝福の思いをもって豊かに蒔く者へ導かれたいと思います。そうして「いつもすべてのことにおいて満ち足りる」者としていただき、さらに「すべての良いわざにあふれる」主の教会、また一人一人の歩みへと導かれて行きたいと思います。